

# Ceremonies of Parting in the Morning in Love among Heian Aristocratic Couples

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5785">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5785</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 男と女の後朝の儀式

―平安貴族の恋愛事情―

倉 田 実

はじめに

平安貴族の恋愛や結婚のありようは、妻問婚（通い婚）という婚姻形態によって大きく規定されていた。結婚三日間、男は女の家を夜になって訪れ、まだ夜が明けない暁の時に帰るのが作法であった。秘めた忍びの恋愛関係でも、男はやはり常にこのように行動し、関係が継続していても同じようにしていた。そこで儀式のようにされたのが、「後朝の別れ」であった。

「後朝」は衣衣で、衣を互いに重ねて共寝した男女が、翌朝にそれぞれの衣装を着て別れることが本来であった。男が帰るに際して、後朝の別れの贈答歌を交わし、帰宅してからは後朝の文の贈答をしていた。後朝の贈答歌に関しては、物語・日記文学・和歌集などに多様な用例があり、すでに様々に言及されている。しかし、後朝の別れに際しての、男女それぞれの振舞いや情趣・風情のありように関しては、まだ十分に整理されていない。

この小稿では、後朝の別れの場において、男や女に具体的にどのような振舞いがあるのかを、文学作品から取り出して整理してみたい。その振舞いが、後朝における情趣や風情とかがわっている。贈答歌を

男と女の後朝の儀式

交わすだけでなく、睦言を交わしたり、格子を上げたり、手水を使ったりと様々な振舞いが見られるのである。そして、あたかも儀式のように行なわれる後朝の振舞いには、それなりのパターンを指摘することができる。この点から、より生活的で実感的な平安貴族の恋愛事情の一端と、物語などでの虚構的な意味合いを探っていきたい。表題に「儀式」としたのは、この意味であり、早朝の男女のありようを検討するということである。以下に用例を取り出すことになるが、悉皆的な例示ではないことをお断りしておきたい。引用は新編日本古典文学全集、和歌は『新編国歌大観』を使用した。『狭衣物語』は新潮日本古典集成に拠り、表記はいずれも私に換えた場合もある。

### 一 『枕草子』の後朝の風情

最初に、『枕草子』を取り上げたい。ここには、四章段に後朝のことが記されており、それを時間的順序によって示せば、七〇段「しつゝのびたる所にありては」が別れる前、六一段「暁に帰らむ人は」が別れる時、三四段「七月ばかり、いみじう暑ければ」が別れた後、一八二段「好き好きしくて人かず見る人の」が別れて帰宅した男、というようになる。まずは六一段から、『枕草子』の記す後朝における男女の

儀式、すなわち振舞いを見ていきたい。

晝に帰らむ人は、装束などいみじううるはしう、ア鳥帽子の緒元結かためずともありなむとこそおほゆれ。いみじくしどけなく、かたくなしく、直衣、狩衣などゆがめたりとも、誰か見知りて笑ひそしりもせむ。

人は、なほ晝のありさまこそ、をかしうもあるべけれ。イわりなくしぶしぶに起きがたげなるを、ウ強ひてそのかし、「明け過ぎむ。あな見苦し」など言はれて、エうち嘆くけしきも、げに飽かず、もの憂くもあらむかしと見ゆ。指貫なども、居ながら着もやらず、まづさし寄りて、オ夜言ひつることの名残、女の耳に言ひ入れて、何わざすともなきやうなれど、帯など結ふやうなり。エ格子押し上げ、オ妻戸ある所は、やがてもろとも率て行きて、昼のほどのおぼつかならむことなど言ひ出でにすべり出でなむは、カ見送られて名残もをかしかりなむ。

思ひ出どころありて、いときはやかに起きて、ひろめき立ちて、指貫の腰こそそこかはは結び、直衣、うへの衣も、狩衣も、袖かいまくりて、よるとさし入れ、帯いとしたたかに結び果てて、つい居て、ア鳥帽子の緒きと強げに結び入れて、かい据うる音して、キ扇、畳紙など、昨夜枕上に置きしかど、おのづから引かれ散りにけるを求むるに、暗ければ、いかでかは見えむ、「いづら、いづら」と叩きわたり見出でて、扇ふたふたと使ひ、懐紙さし入れて、「まかりなむ」とばかりこそ言ふらめ。

(枕草子・六一段「晝に帰らむ人は」)

右の章段は三節に分かれ、最初が序のようで、次が別れを惜しむ好ましい男の場合、最後が帰りを急ぐ好ましくない男の場合となる。主に、後朝に男が着装する次第に焦点が当てられており、そこに両極にある男の様子が記されている。したがって、後朝の振舞いとして、「男が着装する」ということが指摘できよう。一晚過ごして起きて出て行くのだから当たり前なことだが、その様子が後朝における情趣や風情に

かわっていたのは、ここに示されるとおりである。

着装の次第は、節を改めて検討することにして、右の章段に認められるこの他の振舞いを記された順に列挙すれば、次のようになる。

ア 男は、冠物の鳥帽子をかぶる。

イ 男は、「しぶしぶに起きがたげ」に振舞う。

ウ 女は、起きない男を起して帰りを促す。

エ 男は、帰りを促されて別れを嘆く。

オ 男女は、睦言を交わす。

カ 男は、格子を上げる。

キ 男は、女を妻戸に誘って別れて出て行く。

ク 女は、出て行く男を妻戸で見送り余韻に浸る。

ケ 男は、持物の扇や懐紙を懐に入れる。

後朝の振舞いを列挙すると、これだけのことが指摘できる。こうした振舞いの一つ一つに男女の情愛の程が現れるのであり、個人差もあるわけである。この小稿では、こうした振舞いについて、整理をしたいのである。

後朝を記す『枕草子』の他の章段では、三四段「七月ばかり、いみじう暑ければ」に、男が帰った後も横臥して後朝の文を待つ女のこと、一八二段「好き好きしくて人かざ見る人の」に、帰宅して後朝の文を認める男のことなどがある。しかし、この二つは後朝の別れの後のことなので、さらに次の章段だけ見ておきたい。

忍びたる所においては、夏こそをかしけれ。いみじく短き夜の明けぬるに、ツつゆ寝ずなりぬ。やがてヶよろづの所あけながらあれば、涼しく見えわたされたる。なほ今すこし言ふべきことの高く鳴きて行くこそ、顕証なる心地して、をかしけれ。

また、冬の夜いみじう寒きに、埋もれ臥して聞くに、サ鐘の音の、ただ物の底なるやうに聞ゆる、いとをかし。コ鶏の声も、はじめは羽のうちに鳴くが、口をこめながら鳴けば、いみじうもの

深く遠きが、明くるままに近く聞ゆるも、をかし。

(枕草子・七〇段「しのびたる所にありては」  
右の段を先のように整理すれば次のようになるう。

ク 男女は、夏には寝ずに朝を迎える。

ケ 男女は、夏には格子などを開けて、涼しそうに外を眺める。

コ 男女は、鳥や鶏の音を聞く。

サ 男女は、鐘の音を聞く。

最初の二つは、夏に限定される例と思われるが、ク「男女は、夏には寝ずに朝を迎える」ことは、三四段「七月ばかり、いみじう暑ければ」にもあり、清少納言が好んだ逢瀬のありようかもしれない。コとサが、一般的に見られるものとなる。

後朝には、こうした振舞いが認められるのであり、これから引用するものを含め、改めて厳密ではないが時系列的に整理すると、次のようことになる。

- ① 男女は、鶏の音を聞く。
- ② 男女は、鐘の音を聞く。
- ③ 男女は、外の物音を聞く。
- ④ 男女は、暁になったことを恨む。
- ⑤ 男は、起きるのを辛がる。
- ⑥ 女は、起きない男を起して帰りを促す。
- ⑦ 男は、供人か侍女に帰りを促される。
- ⑧ 男は、帰るのをためらい嘆く。
- ⑨ 男女は、睦言を交わす。
- ⑩ 男は、格子を上げる。
- ⑪ 男は、衣装を着ける。
- ⑫ 男は、髪を整えて冠物をかぶる。
- ⑬ 男は、持物の扇・懐紙・笛などを懐に入れる。
- ⑭ 女は、着装する男を見守る。
- ⑮ 男女は、きぬぎぬになるのを恨む。

男と女の後朝の儀式

⑯ 女は、髪を櫛削る・男は、女の髪をかき撫でる。

⑰ 男女は、手水を使い、粥を食す。

⑱ 男は、女を妻戸に誘って庭や空などの景色を眺める。

⑲ 男は、連れ出していた女を寝所に戻す。

⑳ 女は、出て行く男を寝所か妻戸で見送る。

㉑ 男女は、それぞれ後朝の余韻に浸る。

後朝といっても、少なくともこれだけの振舞いが認められるのである。これらのことがすべて行なわれるわけではなく、物語ではこの幾つかを示して後朝の様子を語っている。和歌では、これらの多くが後朝の歌として詠まれている。以下、節を換えて、右記の事項ごとに用例を挙げて確認していきたい。

## 二 後朝の振舞い

① 男女は、鶏の音を聞く。

すでに常識に属するが、鶏は夜明けを告げて鳴く鳥とされ、それを耳にすると男女は別れを急ぐことになっていた。鶏鳴を聞くことで後朝の儀式が始まるのである。

古名、または蔑称とされる「くたかけ」の例でもこの事情は同じであった。

夜深く出でにければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きて背なをやりつる

(伊勢物語・一四段)

東国章段群の一つであり、夜深く出て行った男を恨めしく思った女が詠んだ歌である。上の句は分かりにくく諸説があるが、ここでは触れない。早々に鳴いたために男(背な)が出て行ったとして、女が鶏をののしっている。鶏が鳴くのは、後朝の別れを意味するので、この場合に限らず多く恨めしいのである。まして早目に鳴けばなおさらである。

深い仲ではなくても夜通し話をした男女が、わざと鶏鳴を持ちだし、後朝の風情を仮託することもあった。その例が「函谷関の故事」によった『枕草子』一三〇段「頭弁の、職に参りたまひて」に記される藤原行成と清少納言の場合であった。行成が「鶏の声に催されて」別れたと言って寄こしたのに対して、清少納言はその声を逢坂の関ではなく、孟嘗君の函谷関ではないかと応じて、両者の贈答がされていた。

後朝と鶏鳴との取り合せの例は、容易に認められるので引用はしないが、後朝に鶏が鳴かないとされる例を確認しておきたい。

・明け方も近うなりにけり。鳥の声などは聞こえて、御嶽精進にやあらん、ただ翁びたる声に額づくぞ聞こゆる。

(源氏物語・夕顔巻・一五八頁)

・ほどもなう明けぬる心地するに、鶏などは鳴かぬ、大路近き所に、おぼとれたる声して、いかにとか聞きも知らぬ名のりをして、うち群れて行くなどぞ聞こゆる。

(源氏物語・東屋巻・九三頁)

前者は光源氏と夕顔の後朝、後者は薫と浮舟のそれである。共に鶏鳴がないとわざわざ語られている。これは、後朝であっても別れるのではないからだと思われる。この後すぐ、光源氏は夕顔を某院に誘い、薫は浮舟を三条の小家から宇治に連れ出している。こうした事情と連関して鶏鳴は聞こえないとされるのである。

## ② 男女は、鐘の音を聞く。

鶏鳴と共に鐘音も夜明けを知らせるものであった。寺院では、暁(晨朝)に打鐘されていたからである。和歌では次のように詠まれている。

・あかときと鶏も鳴くなり寺寺の鐘もとよみぬ明け出でぬこのよ

(歌経標式)

・鐘の音にそそや明けぬとおどろけばただ独り寝の枕なり

(清輔集・二四六)

・暁とつげの枕をそばだてて聞くもかなしき鐘の音かな

(長秋詠草・一八二)

一首目は「今以三八字為終句、故曰列尾」の歌として収載されており、『奥義抄』では初句「あかときは」、結句「明け果てぬこのよ」になっている。いずれにしても鶏鳴と鐘音が共に詠まれている。二首目は、鐘音に夜が明けたと目覚めても後朝ではなくただの独り寝であったと嘆いている。三首目は「雑歌暁」とされるが、暁になったと枕を敬てて鐘の音を聞くのは悲しいことだの意になる。

物語では『源氏物語』「総角」巻で、薫と大君の物語に二例ある。二人は契りを交わしたわけではないが、後朝によそえられて語られている。

・明かくなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ。夜深き朝の鐘の音かすかに響く。「今だに。いと見苦しきを」と、いとわりなく恥づかしげに思したり。(源氏物語・総角巻・一三八頁)

・例の、明けゆくけはひに、鐘の声など聞こゆ。いぎたなくて出でたまふべき気色もなきよ、と心やましく、声づくりたまふも、げにあやしきわざなり。

(源氏物語・総角巻・二六七頁)

前者は薫が初めて大君の寝所に侵入して夜明けを迎えた場面、後者は匂宮と中君を結婚させようとした薫が大君と対面した場面になる。共に一晚過ごすことになってしまったために、後朝であるかのように鐘音が聞かれている。前者では大君が鐘音を聞くまでになつたので、薫に「今のうちにせめてお帰りください。暁を迎えることは見苦しいことです」と帰りを促している。後者には「例の」とあり、これは「鐘の声など聞こゆ」にかかっている。前者の場面を指示している。大君との関係が進展しない薫は、匂宮が中君とまだ寝所を共にしているようなので腹立たしいともされている。薫に聞かれるのは鶏鳴ではなく鐘音である。それは空転する大君思慕を表象するようでもあり、特異な機能を果たしている。

③ 男女は、外の物音を聞く。

ここは鶏鳴と鐘音以外の場合である。暁になると人々が動きだし、様々な音が室内に聞こえてくる。また、目を覚ますことで風音や鳥・虫の鳴声も聞こえてくる。男女は、人事や自然が立てる暁の音に風情を感じ、また、別れる時刻を悟ることになる。

特に男の場合は、馴染みの薄い逢瀬の場所であったり、特異な場所であったりした時は、新奇な物音から覚えのない後朝の風情を実感する。光源氏の場合は、夕顔の家でそれを経験していた。

「ごほごほと鳴神よりもおどろおどろしく、踏みとどるかす唐白の音も枕上とおぼゆる、あな耳かしがましと、これにぞ思さるる。何の響きとも聞き入れたまはず、いとあやしうめざましき音なひとのみ聞きたまふ。くだくだしきことのみ多かり。白袴の衣うつ砧の音も、かすかに、こなたかなた聞きわたされ、空とぶ雁の声、とり集めて忍びがたきこと多かり。」

(源氏物語・夕顔巻・一五六頁)

①で引用したのと同日で、それより前の部分である。右の引用部以前には、「暁近くなりけるなるべし」とされて、「隣の家々、あやしき賤の男の声々」が聞かれていた。そして、ここでは、人が立てる「唐白の音」「砧の音」や、自然の「空とぶ雁の声」が聞こえ、「とり集めて忍びがたきこと多かり」とされている。庶民が生活する場で聞こえる物音が、光源氏にとって新奇なのである。

また、朧月夜君との逢瀬では、違った物音が後朝で聞かれている。

「ほどなく明けゆくにやとおぼゆるに、ただここにしも、「宿直奏さぶらふ」と声づくるなり。「またこのわたりに隠るへたる近衛官ぞあるべき。腹きたなきかたへの教へおこするぞかし」と、大将は聞きたまふ。をかしきものから、わづらはし。ここかしこ尋ね歩いて、「寅一つ」と申すなり。女君、

心からかたがた袖をぬらすかなあくとをしふる声につけてもとのたまふさま、はかなだちて、いとをかし。

男と女の後朝の儀式

(源氏物語・賢木巻・一〇五頁)

右は弘徽殿の細殿での密会であり、警備の武官の「宿直奏」の音が聞かれている。夜明けまでの時間は右近衛府の武官が、上官の右大将か右中將に宿直奏の報告をすることになっていた。右大将の光源氏は、自分の他にこのあたりに忍びこんでいる上官がいて、意地悪な同輩から居場所を教えられた武官が探しているのだからと見当をつけている。だから、その声は右大将光源氏にはわずらわしく、密会であることを痛感させている。一方の朧月夜君は、「寅一つ(午前四時頃)」との報告から後朝の別れの悲しい時刻であることを実感し、それを「あくとしふる声」として詠歌にしている。自邸ではあり得ない宿直奏の音が、二人には違った捉え方がされているのである。この後、右大臣邸での逢瀬は、「雨にはかにおどろおどろしう降りて、雷いたう鳴りさわぐ暁」(同・一四四頁)になり、雷雨の音が響いて、右大臣により密会が発覚することになる。二人の物語で後朝に聞かれる物音は、危険なのである。

④ 男女は、暁になったことを恨む。

前項の朧月夜君の歌も、「暁になったことを恨む」ものであった。この場合は、その契機が宿直奏の声であったが、原因が示されない場合も多い。暁は即別れの時刻だからである。この項に関しては、⑤などの他項を参照願うことにして、ここでは引例は割愛したい。

⑤ 男は、起きるのを辛がる。

眠たいのは当然ながら、別れが待っているので起きるのを辛がるのが男の振舞いになる。しかし、そうでない男もあった。前節で引用した『枕草子』六一段「暁に帰らむ人は」には、正反対の起きる様子が記されていた。好ましい男は「しぶしぶに起きがたげ」だが、そうでない男は「いときはやかに起きて」いた。演技だとしても、起き方として「しぶしぶに起きる」のが、後朝の作法であった。このことも多

様に用例があるので、いくつか見ておきたい。

物語では『狭衣物語』に嵯峨の亀山の地から自邸に戻っていた宮の姫君（宰相中将の妹君）と契った狭衣が、自邸に連れて行くとうとして、乳母に次のように言っている。

「ならばぬ暁起きも苦しかるべければなり。まつただ一人ばかり、疾く乗りたまへ」といそがしたまへば、

（『狭衣物語』巻四・二七八頁）

「ならばぬ暁起き」が辛いので姫君を連れて行くのだとするのは、別れたくないからである。先の言葉で言えば「しぶしぶに起き」るのが辛いということになる。この「暁起き」は歌語でもあり、次のように詠まれている。

・置く霜の暁起きを思はずは君が夜殿に夜離れせましや

（後撰集・恋五・九一四）

・行き馴れぬ道のしげきに夏の夜の暁起きは露けかりけり

（古今六帖・一・天・露・五五二）

・あはれとも言はましものを人のせし暁起きは苦しかりけり

（和泉式部統集・四四五）

・宵ごとに帰しはすともいかでなほ暁起きを君にせさせじ

（和泉式部日記）

一首目は「霜のいたく降りける夜」に女のもとに訪れなかった男の言い訳であり、実際の後朝ではない。霜が降りる暁起きの辛さを思はなければ夜離れなどしましうかとしている。新日本古典文学大系『後撰和歌集』は、「霜と月のせいで：帰るには明かる過ぎて人に見られるのがつらいと解すべきであろう」としているが、この解では有明月の頃の逢瀬はあり得なくなる。「暁起き」は歌語であり、それがつらく、さらに霜が降りた寒さなので夜離れせざるを得なかったとの弁解とすべきであろう。二首目は行き馴れない道に草葉が繁っているの、夏の夜の暁起きは、露に濡れるのであったとしている。露けしに涙をよそえて、暁起きの悲しさを詠んでいる。三首目は「方違へに行きて、

夜深きに帰るとて」の詞書があり、女として暁起きの苦しさを体験したことから、それを常とする男の立場に同情した歌になる。四首目も和泉式部歌で、月夜に宮邸に連れて行かれ、その早朝に帰宅させられた折の歌である。暁起きを君にさせて帰させたくないと思うのは、自分も経験したからであり、宵に宮がお帰りになるほうがまだというのである。いずれも「暁起き」は後朝の別れの辛さなのであり、「起き憂し」ともされることになる。

・常よりも起き憂かりつる暁は露さへかかるものにぞありける

（後撰集・恋五・九一三）

・思へただ夢にだにこそ人を見て朝の床は起き憂かりけれ

（林葉集・五・七三〇）

前者は「人のもとに初めてまかりて、早朝つかはしける」とする後朝の歌で、後者は「後朝の恋」の題詠である。「起き憂し」を実感することが、後朝なのである。

⑥ 女は、起きない男を起して帰りを促す。

暁起きを厭う男に対して、早く帰れと促すのは、女の振舞いであった。女側に外聞をばはかる事情がある場合はとくにそうである。

・人のもとより、暁に、とくとくと急がされ出でたまて、

（一条撰政御集・一〇八詞書）

・女のもとにおはしたるに、帰らせ給ひねと言はせたるを、おほし

疑ふ事ありて、早朝、

（朝光集・五七詞書）

・明けぬなり早や帰りねと言ひながらなぞや心を引きとどむらん

（出観集・恋・六九五）

・明けぬなり帰れと言へどいかげむこればかりこそ君にたがはめ

（今撰和歌集・恋・御製・一五六）

前二者は詞書で、共に女が暁に男に早く帰れと促している。詠歌はこのことを直接詠み込んでいないので省略した。三首目は鳥羽院第五皇子覚性法親王（一一二九〜六九）の題詠「後朝」で、女が口では帰れ

と言いながら心では引きとめていて恨んだ歌である。昔も今も女の言葉は両義的である。四番目は二条院(一一四三〜六五)の題詠「暁推留恋」で、夜が明けたので帰れと女は言うけれど、この言葉だけには従えないとしている。初句が覚性法親王歌と同じであり、意識されていよう。女に早く帰れと言われるのは、当然のことと思いつつ、男には辛いのである。

⑦ 男は、供人か侍女に帰りを促される。

女でなくても、その侍女から帰るようにと言われることもある。また、男の事情を知っている供人が促すこともあった。

・名残多く残りぬらん御物語のちめは、げに残りあらせまほしき  
わぎなめるを、御身を心にえまかせたまふまじく、ここの人目  
もいと恐ろしくつつましければ、やうやうさし上りゆくに、心あ  
わたたくして。廊の戸に御車さし寄せたる人々も、忍びて声づく  
りきこゆ。(源氏物語・若菜上巻・八四頁)

・人々いたく声づくりもよほしきこゆれば、京におはしまさむほど、  
はしたなからぬほどに、といと心あわたしげにて、心より外な  
らむ夜離れをかへすがへすのたまふ。

中絶えむものならなくに橋姫のかたしく袖や夜半にぬらさん  
出でがてに、たち返りつつやすらひたまふ。

(源氏物語・総角巻・二八三〜四頁)

前者は光源氏が出家した朧月夜君を訪ねた段である。実事はないといえ暁を迎えて名残は尽きないが、日はどんどん上がっていき、光源氏の心はせかれる。二人の仲は、過去に「軽々しき御名」を流しており、後朝の風情で帰るのははばかられるので、光源氏の供人は忍び声で「声づくり」をして帰ることを促している。

後者は勾宮と中君が結婚した四日目の朝である。供人はしきりに「声づくり」をして京への出立を勾宮に促している。勾宮自身も宇治行きを母明石中宮から諫められていたこともあり、京に遅く戻るの

男と女の後朝の儀式

まずいのでせかされる思いである。しかし、今後の夜離れも想定されるので中君をなだめようとする思いも強い。それが詠歌となり、出立もできずに、何度も引き返してはぐずぐずしている。中君に寄せる愛情がそうさせるのである。

⑧ 男は、帰るのをためらい嘆く。

男は、女に思いを残しつつ、ためらいがちに帰るのがいいのである。

前項⑦の勾宮が「出でがてに、たち返りつつやすらひたまふ」とされるのは、物語における後朝の別れの理想的な形であった。そして、この姿は実生活でも求められたことであろう。『枕草子』六一「暁に帰らむ人は」を再度引用すれば、次のようであった。

「明け過ぎむ。あな見苦し」など言はれて、うち嘆くけしきも、  
げに飽かず、もの憂くもあらむかしと見ゆ。

(『枕草子』六一「暁に帰らむ人は」)

とうに夜が明けたと女からせきたてられて、男はため息をつき満ち足りない様子でいる。それを女は本当につらいのであると同情している。演技だとしても、男は帰るのをためらい嘆くのがいいのである。また、⑥の女に帰りを促されること自体、男の嘆きに他ならない。用例は、既出のもので十分であろう。

⑨ 男女は、睦言を交わす。

前項⑦で取り上げた勾宮の姿は、中君と睦言を交わすことでもあった。『枕草子』六一「暁に帰らむ人は」の好ましい男も、「夜言ひつることの名残」や「昼のほどのおぼつかならむこと」を言わずにいられなかった。勾宮の様子も、これと同じようなことになる。だから睦言は、後朝にふさわしい歌語であった。

・睦言もまだ尽きなくに明けぬめりいづらは秋の長してふ夜は

(古今集・誹諧歌・一〇一五・凡河内躬恒)

・あさましやまだ睦言の程なるをいかに鳴きぬる鳥の音ぞこは



・睦言の皆尽き果てて明けんだに飽かぬ名残はをしからじやは

(林葉集・恋・八六四)  
(重家集・一七八)

一首目は睦言の早い例であり、睦言が尽きないので夜が明けたので、どこに秋の夜長があるのかとしている。後朝になっても睦言は継続するのである。二首目は「歎短夜恋」の題詠で、事情は同じである。いずれも前節に引用した『枕草子』七〇段「しのびたる所にありては」と同じく、寝ずに夜を明かしたことになる。三首目は「後朝恋」の題詠で『古今集』の躬恒歌を本歌にしていよう。こちらでは、睦言は尽きて夜が明けたとしても満ち足りない名残は惜しくないことがあろうかとしている。名残惜しさを痛感するのは、睦言を交わしたからである。いつまでも睦言は交わしていたのであった。

⑩ 男は、格子を上げる。

格子は侍女が側にいれば別だが、後朝では男がする振舞いであった。格子を上げるのは、採光のためであり、その光によって身づくろいをしたり、女を見ようとしたりした。また、庭や空の景色を眺めることもあった。

からうじて明けぬる気色なれば、格子手づから上げたまひて、  
前の前裁の雪を見たまふ。踏みあげたる跡もなく、はるばると荒  
れわたりて、いみじうさびしげなるに、ふり出でて行かむことも  
あはれにて、「をかしきほどの空も見たまへ。つきせぬ御心の隔  
てこそわりなけれ」と恨みきこえたまふ。

(源氏物語・末摘花巻・二九一―二頁)

光源氏が末摘花の醜貌を見ることになる段である。冬の夜長に、寝つけそうにもない荒涼とした無気味な邸内で、何の見栄えもしない末摘花と夜を過ごすことになっていた。だからやっと夜が明けてきたとの思いで、光源氏自ら格子を上げている。そして、踏み跡もない前裁の雪を見出している。さらに、末摘花に「をかしきほどの空も見たまへ」

と促している。これは⑩で扱うように、後朝に庭や空の景色を眺めることは、その風情や情趣にかかわっていた。光源氏は、格子を上げたので一緒に空を眺めようと末摘花を誘ったのである。

末摘花との早朝のことは、どういう訳か再度語られている。新年に訪れた段である。

生ひなほりを見出でたらむ時、と思されて、格子引き上げたまへり。いとほしかりし物懲りに、上げもはてたまはで、脇息をおし寄せて、うちかけて、御鬢ぐきのしどけなきをつくろひたまふ。

(同・三〇三―四頁)

光源氏は新年になったので、末摘花の容貌がましになったかを見ようとして格子をここでも自ら引き上げている。しかし、醜貌にすっかり懲りていたので上げることがせず、脇息に引きかけて光量を押さえている。はっきりと見るのがためらわれたのである。しかし、光が入ったので光源氏は鬢ぐきを整えて身づくろいをしている。この格子は、室内で廂に引き上げ、脇息に引きかけているので一枚格子であった。一枚格子の場合は外御簾になるので、下りていても外は見え、光は入るのである(拙稿「『源氏物語』の格子考」『王朝女流文学の新展望』竹林舎、二〇〇三・五)。

初めての逢瀬であれば、後朝に格子を上げて光を入れ、女を見ようとするのは当然のことになる。柏木も密通した女三宮に対して、そのように振舞っている。

まだ明けぐれのほどなるべし、ほのかに見たてまつらむの心あれば、格子をやをら引き上げて、  
まだ夜は明けきっておらず暗いので、少しでも女三宮の容貌を見たいと思つて柏木は格子を引き上げている。これも一枚格子であった。二枚格子では、次のようなことになる。

有明の月も出でにけり。格子の隙どもより所々漏り入りたるが、いとど心尽くしなるにおぼしわびて、格子のもと掛金を放ちて押しやりたまへれば、残りなうさし入りたるを、女君いとどわび

しくてひき被きたまへるを、とかくひきあらはしつゝ見たてまつりたまふに、齋院にぞいみじく似たてまつりたまへりける。

(狭衣物語・巻四・二五四～五頁)

狭衣が亀山で初めて宮の姫君の顔を見る場面である。⑤で引用した箇所は後日のことになる。狭衣は姫君に無理強いをしなかったものの、ここは後朝の風情である。格子の隙間から有明月の光が射し込むのが、そのわずかな光では満足できない。そこで、「格子のもと掛金を放ちて押し」やっている。この「格子のもと」は、二枚格子の下部のことではなく、格子にあるの意であろう。格子に付く掛金をはずしたのである。そうでなければ「押しやり」がおかしくなる。二枚格子の下部を押しやることはしない。上部を外側に押し上げたのである。室内にいる場合は、格子を押し上げるのは二枚格子、引き上げるのは一枚格子であった。ここは押し上げたことで光が室内に行きわたり、姫君は衣を引き被るものの、狭衣は取り除けて顔を見ることになる。容貌は齋院(源氏宮)と実にそっくりなのであった。物語では格子を上げる振舞いが、多様な意味合いを持つのである。

#### ⑪ 男は、衣装を着ける。

暁に女の家を出るので、男は脱いでいた衣装を身に着ける。これも後朝の振舞いの一つであり、その様子は『枕草子』六一段「暁に帰らむ人は」に丁寧に記されていた。ここでもその部分だけ再掲しておきたい。

指貫なども、居ながら着もやらず、まつさし寄りて、夜言ひつることの名残、女の耳に言ひ入れて、何わざすともなきやうなれど、帯など結ふやうなり。(略)ひろめき立ちて、指貫の腰こそそこかはは結び、直衣、うへの衣も、狩衣も、袖かいまくりて、よるとさし入れ、帯いとしたたかに結び果てて、

〔枕草子〕六一段「暁に帰らむ人は」前半が好ましい男、中略の後の後半は好ましくない男になる。共に指

男と女の後朝の儀式

貫の着装に視線が向けられている。好ましい男は「居ながら着もやらず」とあり、はき終えもしないうちに座ったままで女ににじりよって睦言を交わそうとしている。一方の好ましくない男は、立ったままで「指貫の腰こそそこかはは」と結っている。「かはは」は『枕草子解環』に従い、「かはは」は「かはく」の誤写で、ゴソゴソと同じくガバガバの擬音語と解しておきたい。帰りを急ぐので指貫をはこうとしてゴソゴソ、ガバガバと音を立ててしまうのである。

また、好ましい男は睦言を交わしているうちに「何わざすともなきやうなれど、帯など結ふやうなり」というように、着装を整えている。それと分らないように着装しているのであろう。一方の男は、直衣・うへの衣(袍)・狩衣のいずれであっても、袖をまくり上げて「よると(未詳)」腕を通し、帯や烏帽子の緒をきつく結って、これによしといった様子である。着装は後朝の振舞いの一つであり、その様子が愛情の度合や情趣・風情の有無とかわるのである。

『枕草子』が指貫に注目しているところを見ると、指貫や袴をはいて紐を結ぶことは後朝の別れを最も痛切に感じる振舞いであったかもしれない。

からうじて起きたまひて、指貫の腰ひき結ひたまふにも、隔て多く、心細くおぼえたまふも、「いとかくさま悪しき心の程は、いつの程にならひけるにか」と、我ながらもどかしきまでおぼさる。

解きわびし我が下紐を結ぶ間はやがて絶えぬる心地こそすれ「あまりなる心焦られもいかならむ」とゆゆしきければ、言ひ消ちたまへど、弁の乳母はめでたしとぞ聞きける。

(『狭衣物語』巻四・二七五頁)

狭衣が宮の姫君と契った朝である。狭衣は「からうじて起き」て、「指貫の腰」の下紐を結んでいる。下紐は、解くのは共寝をするためだが、結ぶのは別れるための用意になるので、狭衣は「隔て多く、心細く」感じている。こんな気分になるほどのみっともない恋情をいつ

ならったのかと我ながらじれったく、歌に思いを託している。歌は、これまで解け難かったわたしの下紐を今は結んでいるが、その間でさえそのまま命が絶えてしまいそうな心地がすることだとしている。

下紐を解くのは逢瀬が実現した喜びだが、後朝に結ぶのは別れる悲しみであった。契りを交わした男女が互いに下紐を結んで再会を約することもあったが、狭衣の場合にはこの事情はない。とにかく下紐を結ぶのは、後朝の振舞いなのであり、歌語なのであった。もう少し用例をみておきたい。

・白妙の君が下紐我さへに今日結びてな逢はむ日のため

(万葉集・一一・三一九五旧)

・下紐をゆふつけ鳥の声立ちて今朝の別れになきぞ侘びぬる

(陽成院親王二人歌合・三四)

・睦言はむつまじながら下紐のむすばほれても明かず夜半かな

(為忠家初度百首・五九二)

いずれも後朝の歌と見られよう。一首目は再会を約して下紐を結ぶ例である。二首目が『狭衣物語』と近く、下紐を結ぶにつけて鳥の声がするので、今朝の別れに泣き侘びることだとしている。三首目は「詞和不会恋」の題詠で、睦言を交わしながら、下紐は解けずに結ばれたままであったとするもの。前二首と事情が違うが、薫と大君との関係に当て嵌められよう。これは別として、下紐を結んだりして衣装を着ける振舞いも、後朝の風情なのである。

## ⑫ 男は、髪を整えて冠物をかぶる。

寝乱れた髪や鬢を整えるのは日常的なふるまいだが、後朝の風情にもかかわっている。男の場合は髻を結うので、整髪は鏡をみながら鬢の毛に櫛目を入れることが主であった。そして、冠物をかぶることになる。烏帽子も冠も緒が付いていて、それを顎のもとで固定すれば、頭部の支度は終わる。たびたび引用する『枕草子』は、後朝に帰るのなら固く結ばなくてもいいとしていた。しかし、他に用事のある好ま

しくない男は、「烏帽子の緒きと強げに結び入れ」ていた。冠物をかぶるのも日常的なことで、誰もが同じ振舞いになるのに個性が現れるのである。

先の⑩格子のところ「末摘花」巻の新年の段を引用したが、そこに光源氏が鬢を整えることが語られていた。一部重複して引用すれば、次のようであった。

いとほしかりし物懲りに、上げもはてたまはで、脇息をおし寄せて、うちかけて、御鬢ぐきのしどけなきをつくるひたまふ。わりなう古めきたる鏡台の、唐櫛篋、搔上の箱など取り出でたり。さすがに、男の御具さへほのぼのあるを、ざれてをかしと見たまふ。

(源氏物語・末摘花巻・三〇三〜四頁)

乱れた鬢ぐきを整えようとすると、末摘花の侍女は整髪などに必要な調度、鏡台・唐櫛篋・搔上の箱などを取り出して来た。これらは亡き常陸宮が使用したものであろう。だから男性用も交じっていた。光源氏は早々に退出することはせず、ゆったりと構えている。鬢を整える振舞いをするので、末摘花を妻として待遇していることを語っているであろう。

## ⑬ 男は、持物の扇・懐紙・笛などを懐に入れる。

衣装を着け、冠物をかぶり、持物を懐に入れば着装は終わりである。『枕草子』の好ましくない男もこれが終わってから辞去の挨拶をしていた。

扇や笛などは忘れ物になる場合もあり、後で届けてもらったり、使いの者に取りに行かせることもあった。こうした振舞いは逢瀬の記憶を呼び起こし一種の愛情表現にもなっていた(拙稿「男の持ち物・忘れ物——王朝文学の「通い婚」における愛情の確認——」倉田実編『王朝人の婚姻と信仰』森話社、二〇一〇・五)。

⑭ 女は、着装する男を見守る。

男は、自身で一具を着装するが、この間、女は見守るだけであり、手伝いなどしない。寝所に臥したままである。これまでの『枕草子』の場合も、女は寝たままであった。末摘花にしても寝所からにじり寄るものの光源氏の様子を見守るだけである。⑩⑫で引用した末摘花邸新年の段は、次のことからの続きであった。

東の妻戸押し開けたれば、むかひたる廊の、上もなくあばれたれば、日の脚、ほどなくさし入りて、雪すこし降りたる光に、いとけざやかに見入れらる。御直衣など奉るを見出だして、すこしさし出でて、かたはら臥したまひつる頭つき、こぼれ出でたるほど、いとめでたし。(源氏物語・末摘花巻・三〇三頁)

光源氏は妻戸を押し開けたので「日の脚」や「雪すこし降りたる光」が入り込み室内が闇とは違ってはっきりと見渡せるようになった。そこで、光源氏が直衣などを着装していると、末摘花がそれに気づいて少しだけにじり出てくる。しかし、手伝うことはせず、横になっている。手伝いは侍女の仕事なのである。

⑪で引用した狭衣が指貫をはく時も、そのあとの段に次のように入り、宮の姫君は寝所にいるままである。

二十余日の月なれば、月もまだいと明かきに、雪の光さへくまなくて昼のやうなるに、男君、枕上なる几帳を押しかけて見出したまへれば、(狭衣物語・巻四・二七七頁)

狭衣が枕上の几帳(枕几帳)を押しかけたのは、そこに宮の姫君が臥していたからである。そして、二人して庭の木立を眺めることになっていた。この後のことは、引用はしないが、⑬の事例となる。とにかく後朝では、女は臥したままであらばよかったです。

⑮ 男女は、きぬぎぬになるのを恨む。

この項は④と同じことになるが、衣装のかかわりとしてみておきたい。男が衣装を身につければ、それがまさに男女別々の衣衣(きぬぎぬ)

男と女の後朝の儀式

ぬ)になり、恨めしいことであった。和歌では「おのがきぬぎぬ」が慣用句になっている。

・しののめのほがらほがらと明け行けばおのがきぬぎぬなるぞ悲しき (古今集・恋三・六三七)

・七夕やおのがきぬぎぬなりぬらん空なる雲の中の絶えぬる (清輔集・一〇〇)

・羨まし誰が手枕のたわつておのがきぬぎぬなりてゆくらむ (重家集・二二一)

一首目は「おのがきぬぎぬ」の原拠となった歌で、そうなるのが悲しいとしている。二首目は七夕詠で、「おのがきぬぎぬ」になり雲の中の通り路が絶えたとする。三首目は「見朝婦恋」の題詠で、羨ましい、誰の手枕でたわんだ髪をなでつけ「おのがきぬぎぬ」になってゆくのが、となろう。「おのがきぬぎぬ」になるのを恨む振舞いも後朝の情趣なのである。

⑯ 女は、髪を櫛削る・男は、女の髪をかき撫でる。

女は起きることがあれば、前項⑮の三首目にあるように、「たわ(寝ぐせ)」になって乱れた「朝寝髪」を櫛削ることもあった。また、男の手枕が触れた髪なので櫛削ることはしまいとすることもあった。

・朝寝髪我は削つらじうつくしき人の手枕触れてしものを (拾遺集・恋四・八四九・人麿)

・朝寝髪誰が手枕にたはつけて今朝はかたみと振りこして見る (金葉集・恋上・三五八・津守国基)

・思ひきや妹が黒髪かきやりて我が手枕のたわつけむとは (重家集・一六九)

一首目は『万葉集』巻十一の異伝歌で、「朝寝髪」は愛する人の手枕が触れたので櫛削るまいとしており、男が帰ったあとの歌とすることもできるが、後朝の別れにふさわしい。二首目は詞書に「もの申しける人の髪をかきこして削るを見てよめる」とあり、女が髪を肩越しに

前に回して櫛削る情景を、あたかも後朝の形見と見ているとして詠んでいる。朝寝髪の寝ぐせを誰の手枕でつけたものと、今朝は形見として前に回して見ているのだろうとなる。

男が女の髪をかきやって愛撫したり、顔をのぞき見るためにそうすることもあった。三首目はこの愛撫する例である。⑮の三首目と同じく『重家集』のもので、こちらは「初逢恋」の題詠である。いとしい女の黒髪をかきやって自分の手枕で寝ぐせをつけることになるとは思ったことであろうかとして、共寝をした感動を詠んでいる。これは、「黒髪の乱れ」とされる女の閨怨の歌を踏まえていた。

・黒髪の乱れも知らずうち臥せばまづかきやりし人ぞ恋ひしき

(後拾遺集・恋三・七五五・和泉式部)

・長からむ心も知らず黒髪の乱れて今朝はものをこそ思へ

(千載集・恋三・八〇二・待賢門院堀河)

和泉式部の歌は後朝の折ではなさそうだが、待賢門院堀河の歌は「今朝」とあるので、後朝の文のものとなろう。和泉式部歌を本歌とすることで、乱れた黒髪を男がかきやったことを含意していると思われる。

女の顔を見るため髪を掻きやる例は、夕霧と落葉宮の場合にあった。

内は暗き心地すれど、朝日さし出でたるけはひ漏り来たるに、

埋もれたる御衣ひきやり、いとうたて乱れたる御髪かきやりなど

して、ほの見たてまつりたまふ。(源氏物語・夕霧巻・四八〇頁)

夕霧が塗籠で落葉宮と契った朝である。朝日が漏れてきて明るくなったので、夕霧は落葉宮が覆っていた衣を除けて、ひどく寝乱れた髪を掻きあげて顔を見ている。これも愛情表現だが、夕霧の場合は自身の強引さを落葉宮がどう感じているかと探ろうとしたことになろう。男が女の髪を掻き上げるのも、場合によって意味が異なるのである。

### ⑰ 男女は、手水を使い、粥を食す。

朝になれば手水を使うが、それは侍女の仕事であった。手水の調度は、盥・半挿、及び手巾(手拭)である。水入れの半挿から、盥の上

にかざした手に水を注ぐのが作法であり、この両方が示されていれば、手水を使う場面となる。そして、手水を使えば朝粥をとるのが当時の習慣であった。物語などでは、勤行の前に清めるために手水を使う例もあるが、多くは朝の習慣として、手水と粥がセットになって語られている。

『落窪物語』では、落窪君が少将道頼と結婚した際に、侍女のあこぎが手水を手配している。一日目は夫の帯刀の作略で結婚を知らされていなかったが、それと知ったあとは室札に気を配り、後朝に必要な手水と粥を準備している。二日目は、石山詣でに出掛けている三君の半挿・盥を使い、三日目は帰宅するので叔母に借用を願っている。

いとうれしう、聞えさせたりし物を賜はせたりしなむ、喜びきこえさする。またあやしとは思さるべけれど、今宵、餅なむ、いとあやしきさまにて用侍る。取り交すべきくだものなど、侍りぬべくは少し賜はせよ。まらうどなむ、しばしと思ひはべりしを、四十五日の方違ふになむ侍りける。されば、この物どもは、しばし侍るべきを、いかが。盥、半挿の清げならむを、しばし賜はらむ。取り集めて、いとかたはらいたけれど、頼みきこえさするままに。

(落窪物語・巻一・五五頁)

右は、あこぎが叔母に借用を願った文である。この叔母には、帯刀の友人が方違に來ていると嘘をついて几帳や宿直物を既に借りていた。引用前半は、そのお礼の文言である。ここでは方違が四十五日になったとして、餅と盥・半挿を願っている。餅は三日夜餅にする心算であり、手水の調度も必要と考えたのである。そして、三日目が明けると「あはせ(副食物)、いと清げにて粥参り、御手水参り、急ぎ歩」いている。『落窪物語』はこのセットを好んで語るようである。三君の結婚の際、相手が道頼ではなく面白駒と分かった時、「巳午の刻まで手も洗はせず、粥も食はせで」(同・巻一・一六二頁)とされている。

手水が効果的に作用したのが、匂宮と浮舟の場合であった。

御手水などまゐりたるさまは、例のやうなれど、まかなひめざ

ましよう思されて、「そこに洗はせたまはば」とのたまふ。女、いとさまよう心にくき人を見ならひたるに、時の間も見ざらむに死ぬべしと思し焦がるる人を、心ざし深しとはかかるを言ふにやあらむ、と思ひ知らるる

(源氏物語・浮舟卷・一三〇頁)

浮舟と契りを交わした匂宮がさらに逗留を決意した昼間であり、後朝の別れではない。しかし、それと近似した場面と言えよう。手水が侍女によって用意され、浮舟は介添えをしようとしたが、匂宮は女房の仕事になるので気に染まない。そこで浮舟に使うように言っている。浮舟は薫がいる時、介添えをしていたのだろう。しかし、匂宮はそのようにはさせないでいる。これまで「いとさまよう心にくき人(薫)」に馴染んできたが、「時の間も見ざらむに死ぬべしと思し焦がるる人(匂宮)」が「心ざし深し」なのだ痛切に感じている。「人」表現の対比で匂宮に傾斜する浮舟の心内を語るわけであった(拙稿「源氏物語の「人」の表現性——浮舟の心象に即して——」『中古文学』39、一九八七・三)。日常的な習慣が、物語展開にかかわって意味を持つのである。

⑱ 男は、女を妻戸に誘って庭や空などの景色を眺める。

男は自ら妻戸を開けて出て行くが、開けるのはそのためだけではない。先の『枕草子』では、「妻戸ある所は、やがてもろともに率て行きて、昼のほどのおぼつかならむことなども言ひ出で」とあった。妻戸に寝所から女を「もろともに」に連れて行き、さらに睦言を交わすのである。この「もろともに」が男女の情愛を示す大切な振舞いであった。

①端近き御座所なりければ、遣戸を引きあけて、もろともに見出だしたまふ。ほどなき庭に、されたる呉竹、前栽の露はなほかかる所も同じごときらめきたり。虫の声々乱りがはしく、壁の中のきりぎりすだに間遠に聞きならひたまへる御耳に、さし当てたるやうに鳴き乱るるを、なかなかさまかへて思さるる、

男と女の後朝の儀式

(源氏物語・夕顔卷・一五六〜七頁)

①明けゆくほどの空に、妻戸押し開けたまひて、もろともに誘ひ出でて見たまへば、霧りわたれるさま、所がらのあはれ多くそひて、例の、柴積む舟のかすかに行きかふ跡の白波、目馴れずもある住まひのさまかなと、色なる御心にはをかしく思しなさる。

(同・総角卷・二八二頁)

②今日さへかくて籠りゐたまふべきならねば、出でたまひなむとするにも、袖の中にぞとどめたまひつらむかし。明けはてぬさきにと、人々はぶきおどろかしきこゆ。妻戸にもろともにあておはして、え出でやりたまはず。

(同・浮舟卷・一三五〜六頁)

③は夕顔の家で妻戸に代わる遣戸になるが、そこから「もろともに」庭の光景を見出して、虫の声を聞いている。④は匂宮と中君の結婚四日目の朝、⑤は匂宮が浮舟と契った三日目の朝である。共に妻戸まで匂宮が中君や浮舟を「もろともに」連れ出している。それは、妻戸が別れの場になるからであり、これ以上女が連れ添うことはしない。だから妻戸で別れが惜しまれるのである。また、④では空や宇治川の光景を見出している。

妻戸のことは前項④で触れ、次項⑤にも出てくるが、この他、妻戸が別れの場となることなどは別稿で扱ったので、こちらを参照された(拙稿「源氏物語」の「妻戸」考——寝殿造の出入口——『大妻女子大学紀要—文系—』43、二〇一一・三)。

⑲ 男は、連れ出していた女を寝所に戻す。

密通などで、女を寝所から連れ出していた場合には、そこに戻す振舞いが見られる。

①ことと明くなれば、障子口まで送りとまふ。内も外も人騒がしければ、引き立てて別れたまふほど、心細く、隔つる関と見えたり。

(源氏物語・帚木卷・一〇四頁)

②障子口まで送りたてまつりたまひて、昨夜入りし戸口より出でて、

臥したまへれどもどろまればず。(同・総角卷・二二九頁)

④恨みても泣きても、よろづのたまひ明かして、夜深くゐて帰らたまふ。例の、抱きたまふ。「いみじく思すめる人はかうはよもあらじよ。見知りたまひたりや」とのたまへば、げに、と思ひて、うなづきてゐたる、いとらうたげなり。右近、妻戸放ちて入れたてまつる。やがて、これより別れて出でたまふも、飽かずいみじ、と思さる。(同・浮舟卷・一五五―六頁)

⑤は、光源氏が空蟬と契った朝である。光源氏は紀伊守邸寢殿の西面に休んでいた空蟬を、自身の寢所に当てられた東面に連れ出して契っていた。朝になったので、光源氏は東西の境となる障子口まで空蟬を送っている。この場合は、物語で明示はないが、抱いて送っているだろう。⑥は薫が大君と何事もなく一晚過ごした朝である。二人は寢殿南廂で過ごしており、そこから居所となる寢殿東面に送ったと考えられる。この場合も抱いていた可能性があろう。送ったあと薫は東廂に戻って休んでいる。⑦は匂宮が浮舟と橘の小島で過ごして旧八宮邸に連れ戻ったところである。匂宮は橘の小島に誘った時も浮舟を抱いていたので、帰りも「例の、抱きたまふ」となっている。その匂宮の振舞いに浮舟は感じ入っている。抱いて送り戻すのは、女に耽溺している男の愛情か、あるいは親昵のいたわりを示す振舞いとなる。

⑩ 女は、出て行く男を寢所か妻戸で見送る。

前項⑧で女が妻戸で見送ることをみたが、そうでなければ、女は男が出て行ったあと寢所から動く必要はなかった。そのまま臥していたり、二度寝をしたのである。『源氏物語』の六条わたりの女も、寢所で光源氏が出て行くのを見送っている。

霧のいと深き朝、いたくそのかされたまひて、ねぶたげなる気色にうち嘆きつつ出でたまふを、中将のおもと、御格子一間上げて、見たてまつり送らたまへとおぼしく、御几帳ひきやりたれば、御頭もたげて見出だしたまへり。(源氏物語・夕顔卷・一四七頁)

光源氏が帰りを促されて、眠たさを嘆きつつ出ていくのを、侍女の「中将のおもと」は格子一間分を上げ、枕几帳を退けて女が見送りできるようにしている。女は寢所に横になったまま、頭だけをもたげて見出している。女は何もしなくていいのである。最低限見送る素振りを見せれば愛情表現なのである。

場合によっては乳母や侍女が見送るだけのこともあった。光源氏と女三宮婚姻四日目の朝がそうであった。

鶏の音待ち出でたまへれば、夜深きも知らず顔に急ぎ出でたまふ。いといはけなき御ありさまなれば、乳母たち近くさぶらひけり。妻戸押し開けて出でたまふを、見たてまつり送る。

(源氏物語・若菜上卷・六八―九頁)

光源氏は夢に紫上のことを見て、夜深い中辞去している。女三宮は妻とはいえ幼いので乳母たちが控えていて、光源氏が自身で妻戸を押し開けて出て行くのを見送っている。女三宮は見送りなどしていないと見られよう。そのまま寝て、日が高くなって起きても問題はないのである。

四の君まだ帳のうちに寝たまへり。(落窪物語・卷四・三二―三頁)  
継母の四君が大宰帥と再婚した朝である。寝ていることは結婚に満足している現れと看做されたのであった。自邸にとどまる女は、出て行く男と違って、振舞いは少ないのである。

⑪ 男女は、それぞれ後朝の余韻に浸る。

男女は、後朝の別れの贈答歌を交わし、さらに帰宅した男から後朝の文が贈られて贈答がなされていた。これが大きな後朝の余韻になっていたが、本稿ではこれらのことは割愛している。この他にも後朝の余韻は認められるので、一例だけ引用して終わりにしていきたい。

若き人の御心にしみぬべく、たぐひ少なげなる朝明の姿を見送りて、名残とまれる御移り香なども、人知れずものあはれなるは、ざれたる御心かな。(源氏物語・総角卷・二八四頁)

匂宮と中君との結婚四日目の朝であり、⑦で引用した次に続く段である。見事な匂宮の「朝明の姿」を見送ってから、中君は「名残とまれる御移り香」を嗅いでいる。普段にはない残り香は、男を偲ぶよすがであり、それによって余韻にひたるわけであった。中君の匂宮に寄せ  
る思いをこうして語っているのである。

#### おわりに

以上、引用しなかった用例も多いが、男女が後朝にどのような振舞ってきたかを整理してきた。従来は、後朝の贈答歌しか注目されていなかったが、これだけの振舞いが少なくとも指摘できるのである。物語では、男女の関係性に応じて、これらを案配して語っていた。一つの振舞いに、意味を持たせていたのである。

また、幾つかの項目は、和歌の題材でもあった。院政期にもなる和歌題が飛躍的に増加し、様々な恋の段階が歌題になっていた。後朝に関しても、これまでに「暁推留恋」「後朝恋」「歎短夜恋」「詞和不会恋」「見朝帰恋」などを引例した。これらの検討も必要だが、今回は、後朝の振舞いを整理するだけで終わりにしたい。